

小学校における知性と感性を結ぶ俳句教育プログラムの提案

— 互いを認め合い支え合う学級づくりを目指して —

The proposal of the educational program for an elementary school, utilizing a haiku to improve an intellectuality and sensitivity: aiming at the development of a class which a child accept each other and support each other.

皆 川 直 凡

MINAGAWA Naohiro

鳴門教育大学学校教育研究紀要

第 34 号

Bulletin of Center for Collaboration in Community

Naruto University of Education

No.34, Feb, 2020

小学校における知性と感性を結ぶ俳句教育プログラムの提案

— 互いを認め合い支え合う学級づくりを目指して—

The promposal of the educational program for an elementary school, utilizing a haiku to improve an intellectuality and sensitivity: aiming at the development of a class which a child accept each other and support each other.

皆川 直凡

〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島748番地 鳴門教育大学大学院 学習指導力開発コース
MINAGAWA Naohiro
Naruto University of Education, Graduate School
748 Nakajima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-shi, 772-8502, Japan

抄録：世界有数の短詩型であり日本発信の文化でもある「俳句」を活用し、賢さと優しさを兼ね備えた子どもを育てる方法、ひいては、互いを認め合い支え合うことのできる、愛情に満ちた人間関係を基盤とする学級づくりを行う教育プログラムを開発した。この教育プログラムは、著者と学校教員との協同による俳句の授業、大学院におけるゼミ句会、および大学開放事業において著者が主催した子ども句会の実績にもとづいて作成した。その概要は、以下のとおりである。朝の会で、週1回10分程度、その時期の季語を見つけ、発表する活動を通年実施する。また、季語さがし、俳句の創作、および構成的グループエンカウンターを利用した鑑賞から成る複数時間計画の授業を新学年が軌道にのる頃、夏休み明け、新年といった節目毎に、年間3回程度実施する。

キーワード：知性と感性を育む教育、学級づくり、俳句教育

Abstract : The author developed the educational program which performs formation of a class based on the human relations, utilizing a haiku that is one of the foremost short verse type in the world and is also the culture of Japanese dispatch, the method of bringing up the child who has cleverness and tenderness, therefore based on human relations which is filled with affection that children can accept each other and support each other. Based on the track record of the lesson of the haiku poem by in collaboration with an author and a school teacher, the seminar haiku gathering in a graduate school, and the child haiku gathering that the author sponsored in the university extension enterprise, I created this educational program. The outline is as follows. At a morning meeting, I find the season word of the time about 10 minutes once per week, and carry out year-round enforcement of the movement to announce. Moreover, when a new grade gets off the ground, I break during the summer vacation and carry out creation of the search for a season word, and a haiku poem, and the lesson of two or more hour promposal which consists of appreciation using a constitutive group encounter about 3 times per year for every turning point of the new year.

Keywords : improvement of intellectuality and sensitivity, formation of a class, haiku education

I. 問題と目的

1. 現代の教育課題

2013(平成25年)に文部科学省が公示した教育振興基本計画によって示された教育の方向性に関連して、国立教育政策研究所(2013)は、社会の変化に対応して求められる資質・能力である21世紀型能力について、基礎力、思考力、実践力の3要素を提案し、とりわけ思考力を中核とし、「一人ひとりが自ら学び判断し自分の考えを持って、他者と話し合い、考えを比較吟味して統合し、

よりよい解や新しい知識を創り出し、さらに次の問いを見つける力」と解説した。また、三宅・益川(2014)は、学習の目標は、可搬性、活用可能性、持続可能性の三つの性質をもつべきであるとし、生涯にわたって利用できる学習を想定した。さらに、奈須(2014)は、知識・技能注入から資質・能力を育成とする授業観・学力観への転換が世界的な潮流となっているし、資質・能力を「これからの児童生徒に身に付けさせるべき態度や力」と定義し、思考力、問題解決力、言語や情報を活用する力、人間関係調整能力、自律的に行動する力、社会参画力等

が含まれると述べた。皆川 (2015) は、上記の動向をふまえて、近年の教育心理学とその周辺領域の諸研究を、自立的な学びに関する研究、協同的な学びに関する研究、思考力・表現力を育てる学びに関する研究、創造的な学びに関する研究に分けて検討し、「21世紀の学び」に関わる理論と実践を結ぶ研究について考察した。その結果から、学習者の内発的動機づけや学習のプロセスを重視し、自分とは異なる意見にも耳を傾けることを促し、他の場面への学習の転移や発展にも目配りするといった、自立、協同、創造を統合した教育研究に加え、教育現場と研究機関による協働的な取り組みを拡大することが新しい学びの形成につながるのではないかと述べた。

2016年、学習指導要領の改訂が答申され、小学校は2020年度、中学校は21年度、高校は22年度の入学生から順次、実施に入る見通しである。最大の眼目は、教科の枠を越えて学校教育の重点を「何を教えるか」から「何ができるようになるか」に大きく転換することである。これは、これからの時代に必要な資質・能力を「～ができる」という形で明確にしたうえで、そうした資質・能力を各教科などの学習で育み、学校の教育活動を通して、新しい時代の実社会や実生活の中で役立つ力にまで高めようという考え方である。そのためにアクティブ・ラーニングと呼ばれる学習方法も検討するとした。アクティブ・ラーニングは、課題の発見・解決に向けて主体的・対話的に学ぶ学習を指し、深い学びへと導き、併せて知識・技能の定着や学習意欲の向上も図ろうとする学習ないしは教育の方法である。具体的には、発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習、教室内でのディスカッション、ディベート、グループ・ワークなどを挙げている。このような学習方法は人と人との信頼関係のうえに成り立つものであると考えられる。その基盤として、お互いのことをよく理解し、支え合うことのできる愛情に満ちた人間関係を基盤とする学級づくりを行うことが急務となっている。

2. 本研究の学術的背景

著者は、1990年以來、世界有数の短詩型であり日本発信の文化でもある俳句についての心理学的研究を推進し、21世紀に入り俳句の教育への応用可能性を論じ、俳句を活用することで、賢さと優しさを兼ね備えた子どもを育てることができるという考えを示してきた（著者の博士論文の内容にその後の教育実践を加えて執筆した皆川 (2005) など）。

俳句は季語を必須とする季節詩であり、十七音で構成される世界最短の定型詩であるとされてきた。皆川 (2005) はこの点についての考察を深め、心理学との接点を見いだした。俳句は、表層では場面や風景を描き、深層には作者の心情が潜んでいるという、「意味の二重

性」を有するとして、これが心理学的に最も注目すべき点であるとしたのである。その理由として、俳句という文芸と、心理学の研究対象である「広義の行動」の類似性をあげた。「広義の行動」には観察可能な狭義の行動と、そこから類推される心的過程が含まれるが、これは心理学の二重性であり、ここに俳句と心理学の接点があると論じたのである。同書での論述を以下に要約する。

俳句は文の一種であるが、わずか十七音から成る極小の定型詩であり、その十七音のなかに季語を含むことを必須とする。また、最初の五音のあと、あるいは真ん中の七音のあとに、統語的、リズム的、および意味的にいったん切れを生じ、その切れを生み出す俳句特有の用字法として「切字」がある。こうした定型が、俳句に「意味の二重性」を付与する最大の要因であると考えられる。こうした論の下で、心理学の研究方法である調査法や実験法を用いて、俳句における定型の要素である十七音、季語、切字の構造とその機能についての分析が行われ、俳句に「意味の二重性」という特徴が付与される仕組みが実証された（皆川, 2005）。さらに、皆川 (2014) は、実体験にもとづき、俳句から多様な視点からの発想など、多くを学んだことについて論述した。

3. 教材としての俳句の可能性

日本固有の短詩型であり日本発信の文化である俳句は年齢や立場を超えて親しまれ、作者の生の証となっている。俳句甲子園や夏井いつき氏による一連の実践（夏井, 2015など）などに象徴されるように、近年、その傾向が強まっている。俳句には創作と鑑賞という二つの楽しみ方があり、その醍醐味として句会への参加があげられる。俳句を作る場面では、季語とそれを取り巻く情景に関して何らかの発見や感動がある。その発見や感動のあり方は年齢や経験によって異なり、個性も発揮される。現代の学校教育において、俳句は、主として国語科の教材として扱われ、その仕組みや古典的な作品の解釈に終始する傾向にあるが、新学習指導要領が示す新しい教育の方向性、すなわち自立、協同、創造という3つの理念のもとで、思考力を中核として育てていく教育の内容を考えると、俳句に、よりグローバルな人間教育の題材としての可能性を見いだすことができる。

著者は、1990年以來、世界有数の短詩型であり日本発信の文化でもある俳句についての心理学的研究を推進し、21世紀に入り俳句の教育への応用可能性を論じ、俳句を活用することで、賢さと優しさを兼ね備えた子どもを育てることができるという考えを示してきた（研究代表者の博士論文の内容にその後の教育実践を加えて執筆した皆川 (2005) など）。そして、実際にその方法を提案し、小・中学校教員の協力を得て、実践してきた（皆川 (2012)、皆川・横山 (2013) など）。著者の一連の

著書・論文を読み、その専門領域での研究を志した小学校教諭は、教師の自主学習団体である学力研の資料で「俳句づくりは子どもたちや学級に心の潤いをもたらしてくれる。俳句を通して子どもたちに物事の見方を教えることができる。子どもたちの思いを教師が理解することもできる」と述べ、俳句による人間形成と学級づくりについての可能性を示唆した。また、大学院学校教育研究科の修士課程において著者のゼミを修了し、数年の教職経験の後に博士課程に進学した中学校社会科教諭も、学級づくりや一人ひとりのよさを見いだす個別指導の観点から、俳句の活用可能性を指摘した。2016年には後者の在籍校と県教委から、2017年には前者の所属する学力研からの要請を受け、著者が同趣旨の講演をおこなった。

俳句は、子どもたちの様々な能力を養うことができる魅力的な教材である。俳句の鑑賞を行うことで、言葉の持つ豊かさを感じ、鑑賞力や想像力を養うことができる。また、俳句の創作を行うことで、豊かな表現力や語彙力を育成することもできる。そのため、俳句を題材とする教育実践研究が多く行われてきた。皆川・横山(2013)でも、季語やその他の用語の取り扱いに焦点をあてた俳句学習の実践研究が行われている。

皆川・松田・吉田・劉(2019)は、俳句創作の入門期にある小学校4年生の発達水準を考慮し、よりよい入門学習のあり方を探究した。この研究では、まず俳句の形式について考察した。その結果、俳句は、季語だけに意識を集中し、その状態や動作を詠む「一物仕立て」と、季語とそれとは離れた情景を組み合わせて詠む「取り合わせ」の二つに分けられると考えられた。そして、「取り合わせ」は「一物仕立て」に比べ、高度な観察力、想像力が要求されず創作が行い易いと考えられるという理由から、皆川ら(2019)は、「取り合わせ」による創作学習について、実践をおこなった。

著者は2000年度より、大学院での教育活動としてゼミ句会(俳句の創作と鑑賞の会)をおこなってきた。皆川(2017)は、その成果の一部を分析し、「俳句には、感じる喜び、知る喜び、そして、考える喜びという3つの喜びがある。その背景には人との触れ合いがあり、語り合うことで、一つ一つが深まる。感じる、知る、考えるは、人間の認知過程そのものであり、人間は触れあうことと語り合うことに支えられている」とする、俳句における3つの喜び論を提唱した。自ら考え、対話しながら、新たな解を生み出し、学習場面を離れても利用できることを目指す「21世紀の新しい学び」との関係性を論証した。また、著者は、学部において地域文化とそれに関わる人々との交流をとおして教員としての資質・能力の育成を図ることを目的として、歩き遍路を取り入れた授業を分担で担当しているが、その授業のなかで学生が俳句を創作する教育活動を2007年度より実施し、学生に

よる創作俳句の鑑賞をとおして心理学的効果を検証してきた(皆川, 2011; 皆川・佐々木, 2014; 皆川, 2017a; 皆川, 2017b)。このなかでも俳句会をおこなってきた。これらの俳句会には、人と出会い、お互いを理解し合う構成的グループエンカウンターの特徴が見いだされる。

エンカウンターとは、本音を表明し合い、それを互いに認め合う体験のことである。この体験が、自己や他者への気づきを深めさせ、人とともに生きる喜びや、力強く前進する勇気をもたらすと考えられている。また、構成的グループエンカウンターは、日本では、國分康孝氏らによって打ち立てられた。國分・片野(2001)、國分・國分(2018)などの論考によれば、リーダーの指示した課題をグループで行い、そのときの気持ちを率直に語り合うことを通して、徐々にエンカウンター体験を深めていくものである。人間関係が希薄な現代社会においては、自然にエンカウンターする機会がもちにくくなっていると言われている。そのため、学校では、教師がリーダーとなり、エクササイズを実施し集団でエンカウンターを体験させる教育活動が多く試みられている。エクササイズは、自己理解・他者理解・自己受容・感受性の促進・自己主張・信頼体験という6つのねらいを満たすように用意されているという。例えば、「私はわたしが好きです、なぜならば」というエクササイズでは、自分自身の好きなところとその理由を、グループのメンバーが順番に言うことで、自己受容を促すという。

一方、俳句の創作と相互鑑賞を伴う俳句会では、まず、参加者が季節の風物や身の回りの出来事についての自己表現を行う。同じ題材を選んだとしても、それぞれの感性により、個性豊かな作品が生み出される。つぎに、創作作品を持ち寄り、俳句を鑑賞し合い、他者の俳句のなかから気に入った俳句を選び、感じたことを述べ合う。自分とは異なる見方や感じ方の存在に気づいたり、仲間の意外な一面に気づいたりする機会となる。構成的グループエンカウンターのエクササイズが目指す、6つのねらい(自己理解・他者理解・自己受容・感受性の促進・自己主張・信頼体験)の要素が含まれていると考えられる。そこで、構成的グループエンカウンターのエクササイズとして、季節毎の俳句の創作と鑑賞を位置づけ、適度の自己主張を行い、それを認め合い、支えあう学級づくりの一助とすることを提案する。

II. 教育プログラム

1. 学級活動における素地づくり

1) 季語さがし

進め方は担任教諭の裁量によるが、たとえば、朝の会で、週1~2回10分程度ずつ、その時期の季語を見つけ、発表する活動を通年実施する。あるいは5分ずつに

して毎日行うようにしてもよい。子どもたちは、「春の空」「夏の雲」「秋の風」「冬の山」というように、季節名を冠した季語に気づくことが多いと考えられる。しかし、徐々にでも、直接、季節名がついていなくても、それぞれの季節を表す魅力的な言葉があることに気づかせるようにしたい。以下に、子どもたちに知ってもらいたい季語のうち、季節名を直接用いていない季語を例示する。

【季節名を付けない「春」の季語の例】

暖か 日永 花冷え なごり雪 雪解け 朧月 陽炎
風光る 霞 山笑う 雛祭 草餅 花見 潮干狩 蝶
猫の子 蛙 鶯 燕 梅 椿 桜 木の芽 たんぽぽ

【季節名を付けない「夏」の季語の例】

暑し 涼し 南風 青嵐 風薫る 梅雨 夕立 虹
雷 夕焼け 炎天 入道雲 鯉幟 柏餅 更衣 浴衣
日傘 風鈴 田植え 金魚 蛭 蟬 紫陽花 向日葵

【季節名を付けない「秋」の季語の例】

新涼 残暑 夜長 爽やか 天高し 罌雲 月 台風
天の川 流れ星 霧 水澄む 秋刀魚 案山子 新米
渡り鳥 蜻蛉 虫 コスモス 菊 紅葉 梨 桃 柿

【季節名を付けない「冬」の俳句の例】

師走 大晦日 寒し 木枯し 虎落笛 時雨 雪
山眠る 氷柱 手袋 炬燵 スキー 日向ぼこ クリ
スマス 白鳥 山茶花 水仙 枯木 落葉 大根

【季節名を付けない「新年」の俳句の例】

初日の出 門松 お年玉 年賀状 初詣 書き初め
羽つき 雑煮 おせち おとそ 七草 福寿草 若菜

2) 俳句かるた

学年・学級の状況に応じて俳句カルタを実施し、楽しみながら俳句を覚えることを目指す。本研究の趣旨に合う市販の「俳句かるた」を選定し、各クラスに配付する。有季定型の名句秀句と言われる俳句が網羅されており、季節ごとに色分けするなど季節のイメージをつかみやすい構成がなされているということを基準に、適切な「俳句かるた」を選定する。以下に、子どもたちにとって親しみやすい各季節ならびに新年の俳句を例示する。

【春の俳句の例】

- ・雪とけて一ぱいの子どもかな 小林一茶
- ・古池や蛙飛びこむ水の音 松尾芭蕉
- ・若鮎の二手になりて上りけり 正岡子規
- ・堇ほどな小さき人に生まれたし 夏目漱石
- ・菜の花や月は東に日は西に 与謝蕪村

【夏の俳句の例】

- ・青蛙おのれもペンキぬりたてか 芥川龍之介
- ・越後屋にきぬさく音や更衣 榎本其角
- ・五月雨や大河を前に家二軒 与謝蕪村
- ・涼風の曲がりくねつて来たりけり 小林一茶
- ・閑かさや岩にしみ入る蟬の声 松尾芭蕉

【秋の俳句の例】 クリーム

- ・朝顔に釣瓶とられてもらひ水 加賀千代女
- ・菊の香や奈良には古き仏たち 松尾芭蕉
- ・月天心貧しき町を通りけり 与謝蕪村
- ・柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺 正岡子規
- ・桐一葉日当たりながら落ちにけり 高浜虚子

【冬の俳句の例】

- ・いくたびも雪の深さを尋ねけり 正岡子規
- ・これがまあ終の栖か雪五尺 小林一茶
- ・斧入れて香におどろくや冬木立 与謝蕪村
- ・大晦日定めなき夜の定めかな 井原西鶴
- ・遠山に日の当りたる枯野かな 高浜虚子

【新年の俳句の例】

- ・めでたさも中ぐらゐなりおらが春 小林一茶
- ・年玉を並べ置くや枕もと 正岡子規
- ・元日や手を洗ひをる夕ごろ 芥川龍之介
- ・手毬唄かなしきことをうつくしく 高浜虚子
- ・大風の夜を真白なる破魔矢かな 渡辺水巴

進め方は担任教諭の裁量によるが、一案としては、以下のような進め方が考えられる。ある小学校教諭による実践例である。毎日15分程度時間をとり、2～3回おこなう。始めは1回行うだけで、時間が終わるが、徐々にスピードアップしていく。子どもたちは毎日行うことで覚えていく。勝敗で怒り出す子もいるが、下記のようにすることで、対処あるいは予防することができる。

- ①ルールを明確にする。
- ②低学年では最初からすべてのルールを伝えるのではなく、一つ一つ追加していくようにする。
- ③最初は勝ち負けではなく協力して先生の言ったのを全部取ることにする。
- ④勝ち負けが面白くなってきたときは、1日2試合ぐらいで行う。怒る子、すねる子はあるが、徐々に慣れていく。
- ⑤外国にルーツがある子は特別ルールを適用して、勝ち負け関係なしで行うこともある。

俳句のよさを知り俳句を覚えるだけでなく、試合を繰り返すうちにルールが身につく、クラスとしてのまとまりがでてくるといった効果が期待される。

2. 俳句の授業（俳句の創作と鑑賞）

俳句の創作と鑑賞を含む3時間計画の授業を節目毎に年間3回程度実施する。学級の実態に応じ、実施予定時期には幅をもたせる。新学年が軌道にのる5～6月、夏休み明けの9～10月、新年1～2月の3回が考えられる。5～6月であれば春から夏にかけての季語、9～10月であれば夏から秋にかけての季語、1～2月であれば冬・新年の季語を用いることができる。学習指導要領によれば、俳句は国語科の題材であるが、総合的な学習の時間

(低学年では、生活科)や学級活動に位置づけて行うことも可能である。実際、俳句の季語は天文、地理、生活、行事、動物、植物の各領域から成り、俳句は、理科や社会科学の学習にもつながる題材である。

学習指導略案を下記に示す。俳句の創作までの時間は、小学校4年生か6年生における著者らによる実践例(皆川・大黒, 2004; 皆川・正岡, 2008; 皆川・横山, 2013; 皆川ら, 2019)をモデルとし、鑑賞の時間については、新たに構成的グループエンカウターの形式を取り入れることにする。

第1次: 俳句のきまりや季語について学習する(既習学年については、復習する)。当季の情景や行事、遊びや食べ物、植物や動物など、季節感を味わえるもの・ことを思いうかべ、季節のことばを集めをする。

第2次: 自他が集めた季節のことばを用いて、切字を使うなど表現に工夫を凝らしながら俳句を作る。夏井(2000)を参考に、五音の季語と季語とは直接関係のない十二音のフレーズを取り合わせる技法を指導することも考えられるが、自由創作としてもよい。

第3次: 作った俳句を題材として、構成的グループエンカウターの活動をおこなう。四人一組となり、自分の俳句を気持ちとともに紹介・質問し合い、感想を書き合ったりする。感想を「書き合う」という方法は皆川・横山(2013)や皆川ら(2019)が用いたものであるが、口頭で「述べ合う」という進め方もある(皆川・大黒, 2003; 皆川・正岡, 2008)。

第1次から第3次までの各次を1時間計画としてもよいし、各次に2時間をかける計画としてもよい。たとえば、著者らの実践では、創作と鑑賞のいずれかに2時間をかけ、4時間計画でおこなってきた。すべては、各学年・各学級の状況や担任教諭の裁量による。低学年であれば、深い鑑賞までは求めず、五七五のリズムに親しみながら俳句を作るだけでもよい。季語さがしのために校内を探検した近隣を散策したりする部分に2時間を配置するという考え方もできる。また、島本・皆川(2019)の実践例にみられるように、国語科と生活科をつなぐ試みとして、暑中見舞の葉書を出すという取り組みの中で、俳句を取り入れてもよい。これを夏休みの課題とするという展開の仕方も考えられる。

第2次の授業の展開例として、皆川ら(2019)による小学校4年生を対象として実施した2時間計画の授業の学習指導案を例示する。皆川ら(2019)では、協力校の教頭先生によって行われた、俳句の形式と季語についての2時間の授業に続いて、上記の学習指導案にもとづいて2時間の授業を実施した。これらに続く、成人を交えた鑑賞会を含めて、5時間計画の授業をおこなった。

(1) 「取り合わせ」の指導の授業

- ①これまでの俳句知識の復習: 俳句のきまりや季語について復習する。
- ②日記作り: 生活の中で楽しかったことやがんばったことなどを書く。
- ③俳句の種探し: 俳句の種とは、季語とは離れた情景であり、日記の中から十二音で見つけさせる。
- ④季語選び: どんな情景とも組み合わせやすい、秋の季語を提示し、お気に入りのものを選ばせる。
- ⑤取り合わせによる俳句の創作: 俳句の種と選んだ季語を組み合わせるように指導する。

(2) 自由創作の授業

- ①取り合わせについての復習: 俳句の種と季語を組み合わせることを思い出させる。
- ②俳句の創作: 制限を設けず自由に取り組みせる。
- ③創作した俳句の清書: 3句以内を清書させる。

次の時間には鑑賞会を行い、子どもたちどうし、大学院生、および著者との間で、ワークシートを用いて、創作した俳句を気持ちとともに互いに紹介・質問し合い、感想を書き合った。ここには、構成的グループエンカウターの手法が応用されている。この鑑賞会は、著者の所属大学の大学開放推進事業「なるっ予わくわく教室」において、小学生を対象として3時間計画の俳句教室をおこなった成果と反省点にもとづいて計画された。

皆川ら(2019)は、「取り合わせ」ならびに自由創作の授業における創作俳句の特徴や表現上の工夫についての分析を行い、教育効果について考察した。以下は、その要旨である。直接的な感情表現の有無によって俳句を分類した。その結果、直接的な感情表現を使わず、情景から感情を読み取らせる深みのある俳句が多かった。取り合わせによる俳句では特に少なく、取り合わせによる創作は、感情表現を抑える効果があるとわかった。言葉選びの独自性に優れているものも多く、季語と俳句の種がよりよく引き立てあっていた。一物仕立てによる俳句には季語を表現するのに擬態語や擬声語を用いているものもあれば、それよりも高度な想像力や言語力が求められる比喩表現を用いているものもあり、思考力の発達に個人差が生じる時期であることが垣間見えた。

III. 期待される教育効果と教育現場への提案

本論文で提案したのは、心理学の理論的背景にもとづいて立案され、季節さがし、俳句の創作、そして鑑賞の三位一体から成る体系的な教育プログラムである。この教育プログラムを各学年・各学級の状況に応じて実践することにより、適度の自己主張を行い互いに認め合い、支え合う、愛情に満ちた人間関係を基盤とする学級づく

りの一助となることが期待される。

教育効果の客観的な検証のためには、年度当初と年度末に、よりよい学校生活と友達づくりのための心理尺度、学ぶ意欲と学び方に関する心理尺度などを各学年・各学級の状況に応じて実施し、学級満足度、ソーシャルスキル、および学びの質の変化を測定することが望ましい。

本論文の執筆を出発点として、本教育プログラムの意義とその教育効果の検証の必要性を教育現場に伝えていく活動を行いたいと考えている。

引用・参考文献

- 國分康孝・片野智治 (2001). 構成的グループ・エンカウンター の原理と進め方ーリーダーのためのガイド, 誠信書房.
- 國分康孝・國分久子 (2018). 構成的グループエンカウターの理論と方法: 半世紀にわたる探究の成果と継承, 図書文化社
- 国立教育政策研究所 (2013). 「教育課程の編成に関する基礎的研究報告書 5 社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則.
- 黛まどか・茂木健一郎 (2008). 俳句脳ー発想, ひらめき, 美意識ー, 角川書店.
- 皆川直凡 (2005). 俳句理解の心理学, 北大路書房.
- 皆川直凡 (2011). 心理学からみた遍路体験, その人間形成的意義ー学生による創作俳句の内省・説明文と鑑賞文の分析からー, 鳴門教育大学研究紀要, 教育科学編, 第 26 卷, pp.35 – 42.
- 皆川直凡 (2014) 俳句から学んだことー多様な視点からの発想, 心理学ワールド, 64, pp.23 – 24.
- 皆川直凡 (2015) 21 世紀の新しい学びに関わる理論と実践を結ぶ研究, 教育心理学年報, 54, pp.57 – 70.
- 皆川直凡 (2017a). 短詩型「俳句」の創作・鑑賞と 21 世紀の学びとの親和性, 鳴門教育大学情報教育ジャーナル, 第 14 号, pp.21 – 27.
- 皆川直凡 (2017b). 歩き遍路体験を主題とする俳句の創作と学びの質との関係ー学部授業「阿波学」における取り組みをとおしてー, 第 15 号(1), pp.25 – 30.
- 皆川直凡・大黒伸介 (2004). 俳句を素材とする協同的学習の展開ー知性と感性の育成を目指してー, 鳴門教育大学学校教育実践センター紀要, 第 18 卷, pp.103 – 112.
- 皆川直凡・正岡繁豊 (2008). 俳句を素材とする協同的活動の試みとその評価ー話し合いを円滑に進める要因の分析ー, 日本教育心理学会第 50 回大会発表論文集, p.185.
- 皆川直凡・佐々木智美 (2014). 歩き遍路体験に伴う感動が人間的成長に及ぼす影響ー学生による創作俳句

- 600 句に詠み込まれた情景と心情の分析からー, 鳴門教育大学研究紀要, 教育科学編, 第 29 卷, pp.1 – 14.
- 皆川直凡・横山武文 (2013). 子どもの発達最近接領域を考慮した学習指導の在り方の検討ー俳句をとおした感動・共感体験による季語への関心・知識の深まりー, 鳴門教育大学授業実践研究, 第 12 卷, pp.19 – 27.
- 皆川直凡・松田紘昂・吉田健人・劉晶晶 (2019). 取り合わせによる創作を用いた俳句教育実践とその効果の検証ー児童の最近接発達領域を考慮した俳句教育の試みー 日本教育心理学会第 61 回総会発表論文集
- 三宅なほみ・益川弘如 (2014). 新たな学びと評価を現場から創りだす, 三宅なほみ (監訳)・益川弘如・望月俊男 (編訳), 21 世紀型スキルー学びと評価の新たなカタチー, 北大路書房, pp.205 – 222.
- 奈須正裕 (2014). 奈須正裕・久野弘幸・齊藤一弥 (編) 知識基盤社会を生き抜く子どもを育てる, ぎょうせい.
- 夏井いつき (2000). 子供たちはいかにして俳句と出会ったか, 創風社出版.
- 夏井いつき (2015). 夏井いつきの美しき季節と日本語, ワニブックス.
- ヴィゴツキー (L. S. Vygotsky) (1926). 柴田義松・宮坂瑠子 (訳) (2005) 教育心理学講義, 新読書社

謝辞

本論文の作成にあたり、小学校教諭島本政志先生に、さまざまなご助言をいただきました。心より感謝します。